匈奴の実像を求めて

中村大介（埼玉大学）　臼杵勲（札幌学院大学）

はじめに

> *亜細亜に於ける最初の強大な騎馬民族国家の建設者として歴史上に現れ、五百年の長期に亙って蒙古を中心に活躍し、漢民族の不断の大患となり、長城地帯を挟んでの騎馬民族対農耕民族の所謂南北抗争戦の第一回の花形戦士として、その有名を後世に伝えた遊牧民は即ち匈奴である*（江上 1948: 3）

戦前に長城地帯の調査、研究をした江上波夫の文章であるが、匈奴の魅力を端的に述べた名文である。強大な中国の王朝と対峙する異民族という匈奴の性格は、中国の周辺地域に住む日本人の琴線に触れるものであり、これまで多くの研究が蓄積されてきた。そのなかには、杉山正明（1997）のように、漢が成立する際の真の勝者は劉邦ではなく、冒頓単于であり、漢がその国土をまとめられたのも、匈奴との同盟のおかげであったとする見解もみられ、東アジア史において無視できない存在であることがわかってきた。

一方、匈奴がもつモンゴル高原における最初の帝国という側面は、欧米の研究者の関心を引き、ロシア・ソ連による調査成果を基盤に、1990 年以降、アメリカ、ドイツ、フランス、中国、韓国、日本の調査機関や研究者が、モンゴル科学アカデミーやモンゴル国立博物館といったモンゴルの研究機関と共同研究を展開し、多くの成果を上げている。豊富な副葬品をもつ墓の調査でなく、居住様式の研究（Honeychurch & Amartuvshin 2007）もみられ、多方面から匈奴の実態が明らかにされつつある。

モンゴル高原でいつ移動性牧畜社会が成立し、現在の私達が想像する騎馬遊牧民が成立したのかは、重要な問題であるが、匈奴の段階にはすでに成熟期に至っていたことは異論がないだろう。そして、匈奴はそれまでのモンゴル高原の移動性牧畜民が持っていない要素をもっていた。それが土城を含む囲壁施設である。漢との接触により受容したものであるが、それに伴い瓦窯などの生産遺跡も形成されていった。ともすれば、漢の影響が強いように感じられるかもしれないが、漢にはみられない地中海世界から中央アジアの文物もみられるため（Honeychuch 2015）、独自の世界を築いていたといえる。つまり、匈奴は広い交流網をもち、柔軟に外部と対応してきた稀有な社会であったといえる。匈奴の次に草原の覇者となった鮮卑や柔然に土城がみられないこともそれを補強しているだろう（木山・他 2023）。そこで、本発表ではそのような特徴をもつ匈奴の由来と実像の一旦を考えてみたい。

1. 匈奴の出現期の様相

『史記』秦本紀には恵文王 7 年（前 318 年）に「韓、趙、魏、燕、齊帥匈奴共攻秦」とあり、初めて文献に匈奴の名前が出てくる。しかし、『戦国策』秦策二には同じ内容が義渠との連携になっており、『史記』張儀列には戦国策と同じく義渠があてられているため、義渠とみるのが正しい（吉本 2006）。本当に匈奴としてよいのは、『史記』廉頗藺相如列伝にみえる、前 245 年頃に趙の李牧が雁門で匈奴を大々的に破った記事からのようである（林 2007）。戦国時代のオルドス高原とその東の岱海地区には、楼煩、林胡といった騎馬遊牧民がいた（図 1）。彼らが趙に討たれたり、帰属したりした結果、匈奴が南下してきたのである。秦の統一後も、オルドス周辺に匈奴らが入ってきたようであり、秦始皇 32 年（前 215 年）に蒙恬が北の胡を討ち、オルドスを取り戻したと記録されている（『史記』秦始皇紀）。その後、蒙恬は長城を築き、当時の頭曼単于では秦に勝てなかったという（『史

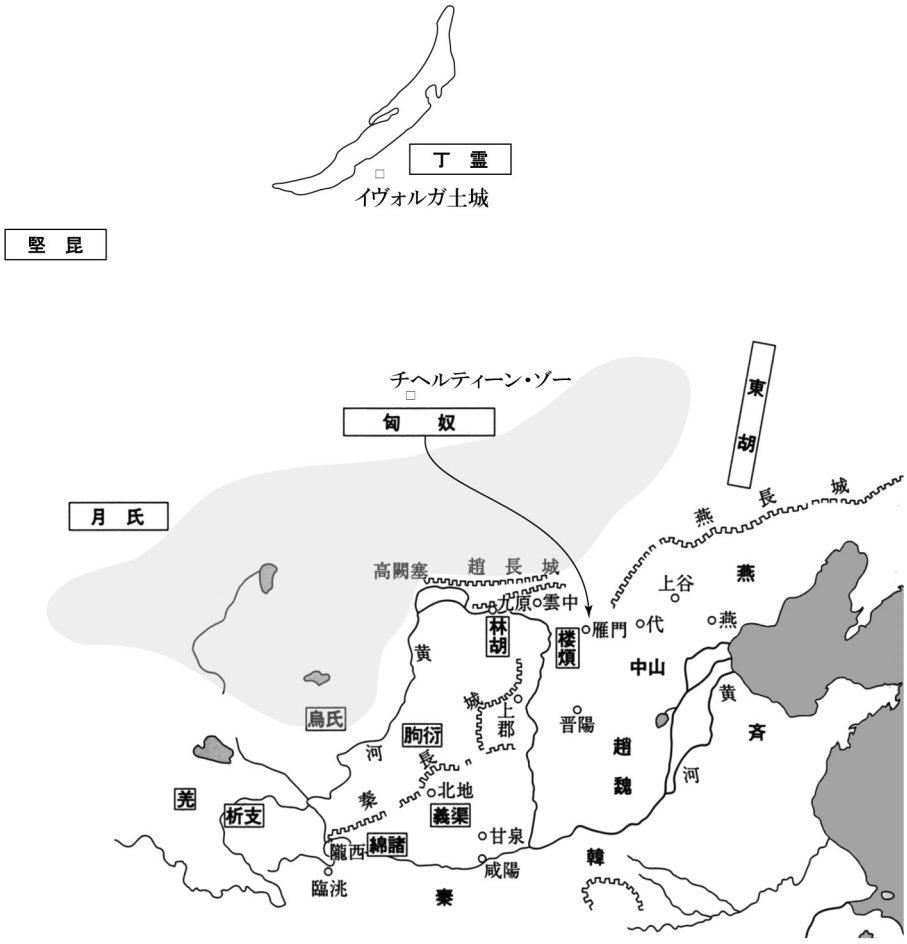


図1 前3世紀の戦国諸国と騎馬遊牧民（林2007を改変）

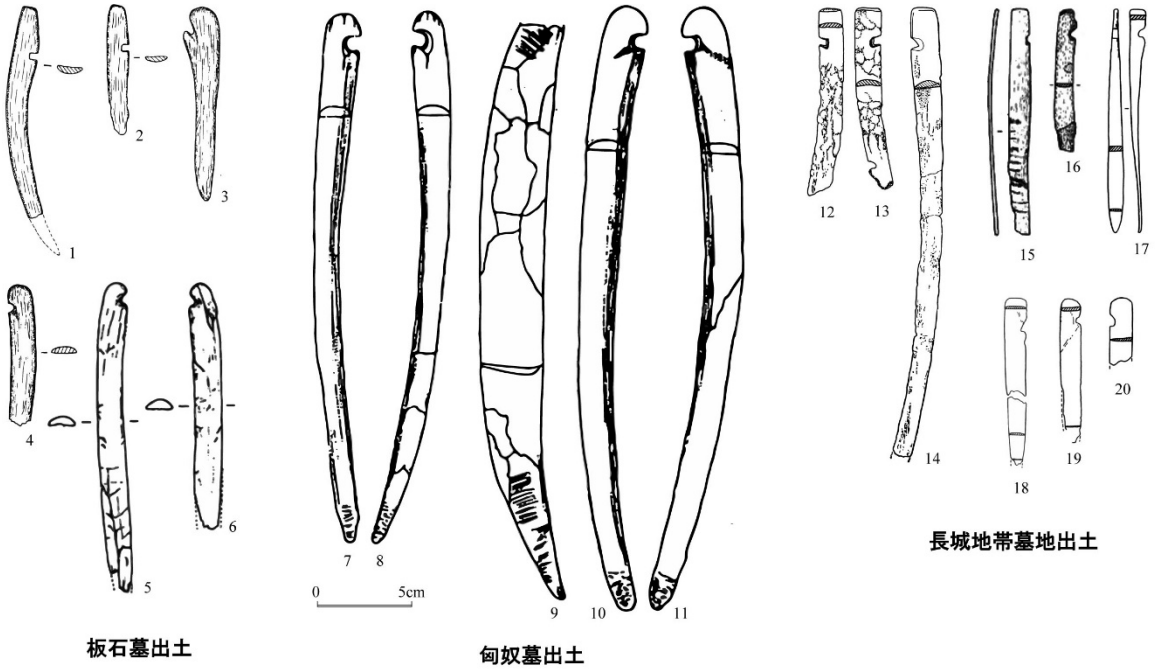
記』匈奴列伝）。頭曼単于時代の匈奴は、西の月氏、東の東胡に圧迫されており、最も強い集団ではなかった（林2007）。しかし、冒頓単于が出て以降、東の東胡、西の月氏、南の楼煩、白羊王を討つほどに成長した。その際、蒙恬がすでに亡くっていたことも相まって、匈奴はオルドスを再度奪取したようである。

以上のように、匈奴は黄河の蛇行地の南北を頻繁に往来していたため、その起源がゴビ砂漠よりも南の方にあると考える研究が多かった。考古学でも、長城地域のオルドスや岱海地区の後期北方青銅器をもつ文化（桃紅巴拉, 毛慶溝文化）が、匈奴であったする見解もみられる（江上、1948；田・郭、1982）。しかし、モンゴル国内で出土する匈奴の考古資料とは相違が大きい。また、1995年に報告書が刊行されたブリヤートのイヴォルガ土城では前3世紀に遡りうる匈奴の資料が出土するものの、モンゴル国内ではこの時期の資料が希薄である。近年まで出現期の様相がつかめない状況が続いていた。

2. 起源の問題

匈奴の起源に関しては、漢以降の華夏民族の関心であったらしく、『史記』や『晋書』などでいくつかの説がみられる。多くが夏后氏の子孫とあり、元々、匈奴は華夏民族と関わりのある民族であったとしている。その一方で、老人を大事にしないことや礼儀を知らないなど、儒教に即さない性質もつ人々として卑下している。考古学的には前述した長城地帯に起源をもつという見解が出たのち、モンゴルやブリヤートに分布する板石墓が注目され、板石墓の人々と長城地帯の人々が混血して匈奴が形成されたという見解が提示された（Төрбат 2004; Tumen 2006）。地理的に考えて、板石墓の人々が匈奴の起源の一つというのは妥当であるが、この墓制の終焉と匈奴の環状墓の出現まで200 年は空白期間があり、墓からの連続性は曖昧である。しかし、いくつか連続性を示す要素はある。その代表的なのものが複合弓の弭である。

スキタイ・サカは60～80cm 程度の小型の複合弓を使っていたが、匈奴の時代には120～160cm の大型の弓が草原一帯に普及したという（Хазанов 1966）。切欠きのある骨角製弓弭は、2 枚を張り合わせて弓の先端に接着する（図 2）。高浜秀（2010）は、この種の複合弓は青銅器時代の草原地帯東部で生まれたとし、内田宏美（2011）は、狩猟び遊牧を行う人々が住む山岳森林ステップで出現し



1, 2. ブドゥン 17号墓 (沿バイカル) 3. ナリン-フンドゥイ6号墓 (ブリヤート) 4. マンダル・ゴビ 5号墓 (モンゴル, ドントゴビ県)
5, 6. オーシギン・ウヴルI-1号板石墓 (モンゴル, フブスグル県) 7-11. ブルハン・トルゴイ6号匈奴墓 (モンゴル, ボルガン県)
12, 13. 王大戸 5号墓 (隴山地域) 14. 崞県窯子2号墓 (岱海地区) 15. 玉皇廟54号墓 (燕山地域) 16. 玉皇廟74号墓
17. 井溝子 28号墓 (シラムレン川流域) 18. 井溝子 3号墓 19. 井溝子32号墓 20. 井溝子 57号墓

図2 骨角製弓弭の地域差(Цыбиктаров 1998; 高浜2010; Төрбат нар. 2003; 寧夏文物考古研究所・他2016; 北京市文物研究所 2007; 王立新・他2010)

図 3　エメールト・トルゴイ 3 号墓 (1-2) 及び 7 号墓 (3-4)(Энхтөр нвр. 2020)

たと推定している。

匈奴の弓は両端の弭とグリップ（図 2: 9）に骨角を使う。鉄器時代の弓には弭しかなく、弭の長さと幅を考慮すると匈奴のものより小さい。また、弭は頭部形状によって円頭弭（図 2: 2-8, 9-11）と平頭弭（図 2: 12-20）にわかれる。楊建華ら（2016）も異なる資料から指摘しているが、匈奴の弭は大型化しているものの、型式的には板石墓のものを継承し、長城地帯の弭とは異なっていたといえる。つまり、匈奴を構成する集団には、確実に板石墓の人々が含まれていたのである。

長城地帯の騎馬遊牧民が匈奴に祖先に含まれていたかは考古学的には定かではないが、近年、アルハンガイ県のエメールト・トルゴイで下部構造が長城地帯の墓と類似する板石墓が発見された。馬 2 頭、牛 1 頭、羊 8 頭、山羊 5 頭の頭骨副葬、出土遺物に含まれる青銅製匙といった要素から、オルドスや岱海地区の騎馬遊牧民と交流があったといえる。また、ここの 7 号墓は上部構造に石敷

をもつと報告されているが、アルタイ・サヤン地域のサカに関連する遺物（図 3: 3-4）が出土している。これらの墓は匈奴出現前夜の交流を示すものであり、今後こうした事例が増加する可能性があるだろう。

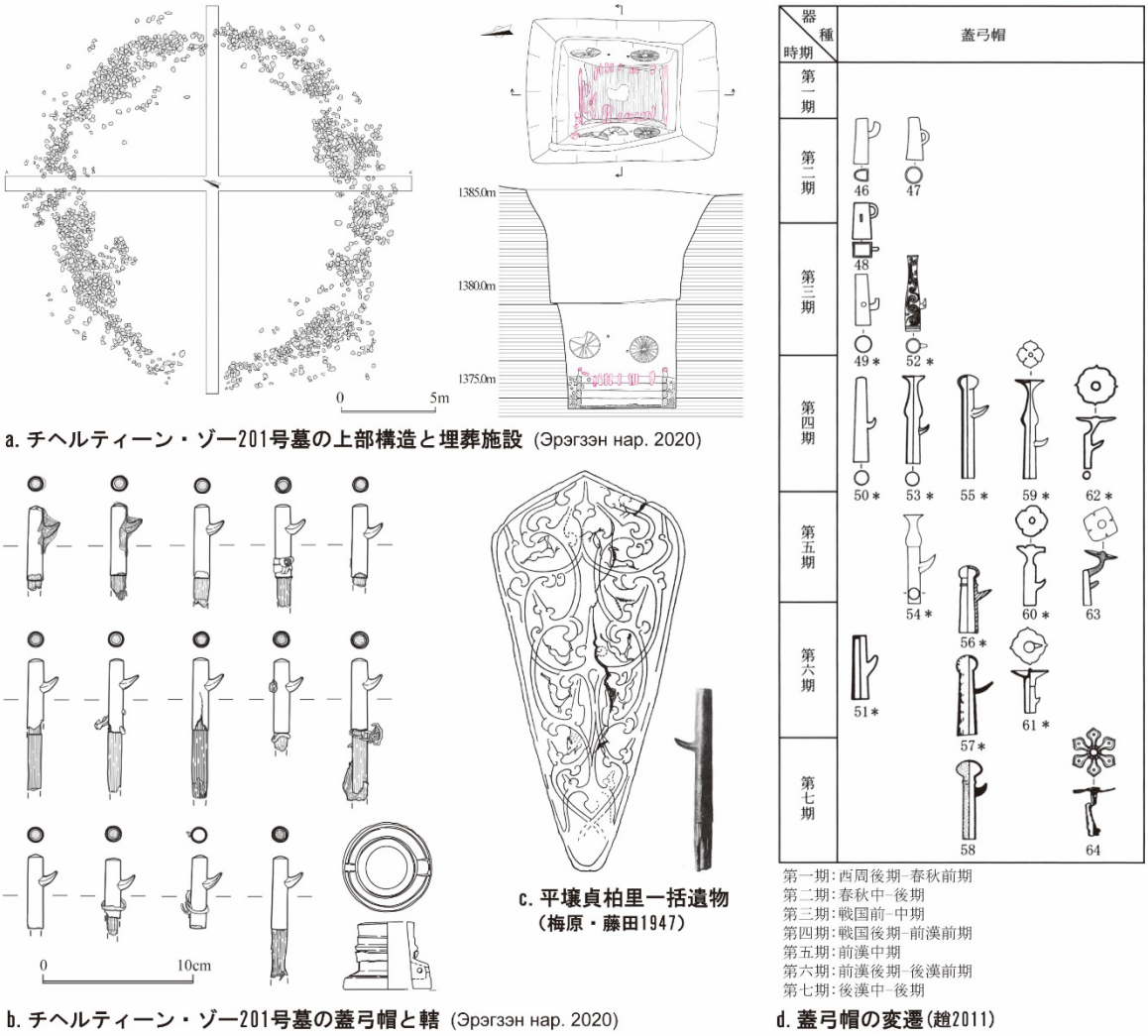
3. 初期匈奴墓

多くの研究者が指摘しているように、匈奴墓の年代は紀元前後交代期に集中している（白石 2022; 大谷 2023）。匈奴墓には単于、王クラスの方形の基壇墓、それより下位の環状墓に大別される。両方とも匈奴以前の墓制に系譜を辿れない。環状墓に関しては、強いて言うならば、アルタイ山脈のパジリク文化墓に近いかもしれないが、前者の上部構造が石を環状に配列するに対し、後者は円形に敷石或いは積石をする点で異なる。

表 1 チヘルティーン・ゾー201 号墓の年代

分析対象	14C 年代	2σ較正年代
木棺	2130±30	205-51 BC (84.6%)
鋳造鉄器	2195±20	360-272 BC (56.6%) 266-242 BC (7.2%) 236-174 BC (31.7%)
青銅器付着木材	2230±20	381-346 BC (19.4%) 316-203 BC (76.0%)

さて、近年、ウランバートルから南へ約 200km のところで、チヘルティーン・ゾー墓地が発見され、14C 年代では前 3-2 世紀に遡りうる大型環状墓が発見された（表 1）。木槨の上に四輪馬車を副葬した貴族墓であり（図 4a）、多数の副葬品が伴っていた。馬車も含めて漢からの贈与品が多いた



a. チヘルティーン・ゾー201号墓の上部構造と埋葬施設 (Эрэгзэн нар. 2020)

b. チヘルティーン・ゾー201号墓の蓋弓帽と轄 (Эрэгзэн нар. 2020)

c. 平壌貞柏里一括遺物（梅原・藤田1947）

d. 蓋弓帽の変遷（趙2011）

図4　チヘルティーン・ゾーと関連遺物

め、紀元前後交代期の貴族層の墓とかわらないと考える研究者もいるが、車馬具がその時期よりも古いことを指摘しておきたい。図 4d に示したように趙海州（2011）の編年を参考にすると、蓋弓帽と轄（車軸留）の型式が（図 4b）、戦国後期から前漢前期に該当する。武帝期（前 141-87 年）開始前後である可能性が高いだろう。なお、類似した事例として、平壌の貞柏里一括遺物がある（図 4c）。楽浪郡初期とされることも多いが、馬具からみて、チヘルティーン・ゾー201 号墓と同年代である。

4. 遺伝学的研究からみた系統

モンゴルにおける遺伝学的研究は急速に進んでおり、ジョン・チュンウォンらによって青銅器時代から中世までの遺伝的特徴の変遷が明らかにされた（Jeong 2020）。それによると、匈奴の遺伝的特徴に寄与したのは、在地の板石墓文化、アルタイ・サヤン地域のウユク・サグリ文化、中央アジアのバクトリア・マルギアナ複合（BMAC）に関連する人々であるという。実際には、ウユク・サグリ文化の人々が、ウラル山脈東麓のシンタシュタ文化、バイカル周辺の青銅器文化、BMAC に由来する人々の遺伝的特徴をもち、それがモンゴルではチャンドマニ文化として初期匈奴形成に遺伝的に寄与した。BMAC はイラン系であるので、おそらくはサカや月氏に関わるものだろう。その後、サルマタイと漢民族が、後期匈奴（前 50 年以降）の遺伝的特徴に寄与しており、その時期には、かなり多様な外見の人々が匈奴として活動していたといえる。初期匈奴については、前述したエメールト・トルゴイの事例とある程度合致し、後期匈奴ついては、ガラス小玉を含む装身具の流通（中村・田村 2023）がサルマタイと関連しうる。漢民族関係の遺伝情報は、単なる困窮農民ではなく、墓をつくることができるような身分の移入者がいたと推定される。漢文物の流入に伴う上位階層の婚姻に関わるものであろうか。

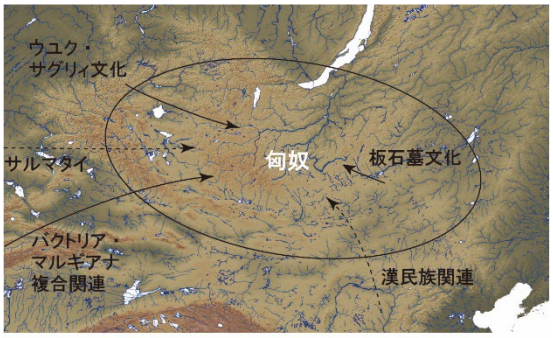


図 5 匈奴の遺伝的影響関係（実線は初期匈奴；破線は後期匈奴，Jeong et al. 2020 を基に作成）

モンゴル西部のタヒリン・ホトゴル墓地とショムボージン・ベルチル墓地の被葬者のゲノムを分析した結果、墓をもつことができた貴族層のなかでも、衛星墓（陪冢）に葬られた下位層ほど遺伝的多様性が高く、上位階層ほど特定の遺伝的特徴に絞られることが判明した（Lee et al. 2023）。匈奴の役職は『史記』に記録されており、（撐犁孤塗）単于の下に、左右の賢王（屠耆王）、谷蠡王、大将、大都尉、大当戸、骨都侯がおかれ、左右賢王から左右大当戸まで、大は万騎、小は千騎を率い、二十四の長が万騎と号したという。二十四長はさらに千長、百長、什長、裨小王、相封、都尉、当戸、且渠を置いた（沢田 1996）。役職と二十四長の数が合わず、軍事と政治の役職の関係がどのようになっているのか解釈が難しいが、呼衍、蘭、須卜氏が上位の役職を世襲したことが知られている。また、『漢書』では単于の姓は攣鞮とあり、上位階層は全て特定の氏族が世襲していた。モンゴル西部の事例も上位階層はこうした世襲貴族であった可能性があるだろう。

おわりに

匈奴の遺伝的な起源の主体は、どうやら板石墓文化に求められるようであるが、墓制の連続性はみられないため、前 4～前 3 世紀の間に何らかの社会的変化があったとみるほかない。初期匈奴の遺伝的特徴に寄与したチャンドマニ文化も北西部のアルタイ・サヤン地域にあるので、北側で匈奴形成につながる何らかのイベントがあったのではないだろうか。ブリヤートのイヴォルガ土城のように、匈奴はバイカル湖へ注ぐセレンゲ川流域に拠点となる土城や集落を形成し続けており、モンゴル高原の北縁は匈奴にとって重要な地域であったいえる。

多様な人々を麾下に入れたことからわかるように、匈奴は、かなり柔軟な対応をする社会を有し

ていた。冒頭でも述べたが、前 2 世紀末以降に急増する土城もその表れであろう。明確な拠点を形成する事例は、その後の鮮卑、柔然などでもみられず、ウイグル時代まで飛んでしまう。冒頓単于、老上単于の最盛期から文化や社会の様相が変わっていったと推定されるが、変化し続ける柔軟性こそ匈奴の実像なのである。

本発表は、「草原地帯における輸送動物出現とモニュメント築造からみた社会複雑化研究」（代表: 中村大介, 2022-2026 年度, 基盤研究(A), 22H00012）、「囲壁施設・生産遺跡を中心とした初期遊牧国家の考古学的研究」（代表: 臼杵勲, 2023-2027 年度, 基盤研究(A), 23H00019）

引用文献

内田宏美 2011「古代北東アジアの複合弓について」『環日本海研究年報』18: 67-75.
梅原末治・藤田亮策 1947『朝鮮古文化綜鑑』第 1 巻, 養徳社
江上波夫 1948『ユウラシア古代北方文化』全国書房
大谷育恵 2023「漢式文物の匈奴領域への拡散」『日本考古学協会第 89 回総会研究発表要旨』
木山克彦・他 2023「モンゴル国における匈奴とウイグルの城址」『埼玉大学紀要（教養学部）』58(1): 125-148.
沢田勲 1996『匈奴: 古代遊牧国家の興亡』東方書店
白石典之 2022『モンゴル考古学概説』
杉山正明 1997『遊牧民から見た世界史』日本経済新聞社
高浜秀 2010「中央ユーラシアの複合弓」『金沢大学考古学紀要』31: 31-43.
田広金・郭素新 1982「匈奴墓葬的類型和年代」『内蒙古文物考古』1982-2: 8-17.
趙海洲 2011『中国古代車馬の考古学的研究』（岡村秀典監訳, 石谷慎, 菊地大樹訳）科学出版社東京
中村大介・田村朋美 2023「アジアにおける漢代併行期のガラス流通」『古代学研究所紀要』32: 18-28.
寧夏文物考古研究所・彭陽県文物管理所 2016『王大戸与九龍山: 北方青銅文化墓地』文物出版社
林俊雄 2007『スキタイと匈奴: 遊牧の文明』講談社
楊建華・邵会秋・潘玲2016『欧亜草原東部的金属之路: 絲綢之路与匈奴聯盟的孕育過程』上海古籍出版社
吉本道雅 2006「史記匈奴列伝疏証: 上古から冒頓単于まで」『京都大學文學部研究紀要』45: 33-83.
Honeychurch W. 2015. Inner Asia and the Spatial Politics of Empire. Springer.
Honeychurch W. & Amartuvshin Ch., 20007. Hinterlands, Urban Centers , and Mobile Settings: The "New" Old World Archaeology from the Eurasian Steppe. Asian Perspectives. 46(1): 36-64.
Jeong et al. 2020. A Dynamic 6,000-Year Genetic History of Eurasia’s Eastern Steppe. *Cell*. 183: 890–904.
Lee J. et al., 2023. Genetic population structure of the Xiongnu Empire at imperial and local. *Science Advance* .9(15). DOI:10.1126/sciadv.adf3904.
Tumen D., 2006. Paleoanthropology of ancient population of Mongolia, Mongolian Journal of Anthropology. Archaeology and Ethnology. 2: 90-108.
Эрэгзэн Г. нар. 2020. *Чихэртийн зоо ба Баянцагааны дурсгал*. Улаанбаатар.
Төрбат Ц., 2004. *Хүннүгийн жирийн иргэдийн булш*. Улаанбаатар.
Хазанов А. М., 1966. Сложные луки Евразийские степей и Ирана в скифо-сарматскую эхоху. *Материальная культура народов Средней Азии и Казахстана. 29-44. Наука*